

3

急性虫垂炎その他 (小児外科)

1) 急性虫垂炎

昔は発見が遅れて、盲腸炎になってからみつかっていたため、「もうちょう」として知られています。今では盲腸炎になることは多くありません。食べる量が多い十代から二十代に多い病気であり、就学前には少ない病気です。特別な症状はなく、食欲がない、吐き気がする、みぞおちの痛みなど腸炎と同じような症状で始まります。右下腹部が痛いと思われていることが多いですが、実際には色々な場所が痛くなります。子どもでも虫垂が破れるまでには2日程度かかるのですが、いつから発症したのかは分からない場合も多く、特に5歳以下では破れてからみつかることがほとんどです。この病気を疑った場合、最終的には小児外科または外科のある病院に紹介されます。小児では、大人よりも放射線の影響が将来に残りやすいので、超音波検査で診断を行います。10人に1人くらいは診断が難しい場合があり、診断を確定するために、続けて受診したり、入院したりする必要があります。約半数は自然と治りますが、半数は手術が必要となります。虫垂炎の手術は「簡単なもの」と思われていますが、難しい場合もまれではなく、ごく稀に一生に影響するような後遺症を残すことがあります。手術すべきかどうかの判断は簡単ではありません。

2) そけいヘルニア

俗に脱腸と呼ばれることがあります。オムツを替えるときや

お風呂に入った時に気づくことが多いようです。内側寄りの足の付け根が膨れていることに気づいたら、一度、かかりつけの小児科に相談してみてください。「そけいヘルニア」と診断されれば、時期を見て手術することが必要となります。この膨らみの中には、お腹の中から伸びた「ヘルニア^{のう}囊」という袋が入っており、その中には腸や卵巣が入っていることがあります。触ってみて硬い場合には、すぐに病院に行ってください。場合によっては、緊急の処置や手術が必要です。そけいヘルニアはよくある病気なので、周りの方に聞いてみると知っている方がいらっしゃるかもしれません。

3) 肛門周囲膿瘍

「痔瘻」といわれますが、成人のものとは全く異なる病気です。肛門の左右もしくは片方にできることがほとんどです。2歳までの子どもの肛門直前の腸の免疫が未熟な事によって起こるとされており、手術してはならない病気です。皮膚が赤くなつて膨れますが、病気の正体は、腸の壁にできた膿瘍であり、本来は腸の中に排膿して治ります。しかし、何らかの理由で腸の中に排膿できない場合に、皮膚側に膿が進んできて排膿します。皮膚のケアが悪かった訳ではありません。

5歳を過ぎても治らない場合には、特殊な腸の病気や免疫の病気を持っている場合、あるいは小さいときに起こした肛門周囲膿瘍の名残が残っている場合を考えますので、一度小児外科を受診してください。

吉元 和彦